

「茅渚の海ふたたび」市民による環境モニタリングシステムの構築について

NPO法人釣り文化協会 代表 来田 仁成

1. 活動方針・目的

釣り人が中心となって大阪湾の環境をモニタリング（監視）し、釣り人の視点での大阪湾の釣り場環境の現状や変化を分析・評価して、市民に生きた情報として発信する。

この取り組みによって、釣り人のマナーの向上と環境意識の高揚を図り、釣り人一人ひとりが大阪湾再生に取り組むと共に、市民や関係機関との協働の裾野を広げ、「市民による環境モニタリングシステム」としてネットワークの構築をめざす。

多くの市民参加により、市民の目線で大阪湾の現在（いま）を知り、「茅渚の海として再生を図る取り組み」や「100年後、1000年後も茅渚の海であり続けるための取り組み」につなげていくため、「まず、できることからはじめていこう」をモットーに取り組んでいる。

（平成18年度全国都市再生モデル調査に選定）

2. 活動内容

多くの市民が参画したモニタリング調査の実施
モニタリングシステム構築検討会議の開催
新鮮な情報を発信する体制の整備
シンポジウムの開催

3. 今後の課題等

釣りは市民に最も身近なレジャーであるにも拘わらず、大阪港（大阪市）で可能なのは、わずかに「南港魚釣り園」の一箇所のみであり、市民が「釣り」を通じて海とふれあえる空間が少な過ぎる。

大阪湾再生のためには、希薄になってしまった住民・市民と大阪湾との関わりの再生を図ることが求められており、釣りは子どもからお年寄りまで最も気軽に海を体感できる文化行為であり、海を都市環境インフラとして考える場合、適切な釣り場の整備が不可欠である。

「ちぬの海ふたたび」 市民による環境モニタリングシステム の構築について



【URL】 <http://www.turibunka.or.jp/>

1

大阪湾水質調査

■ 市民の視点から海をみる

海と岸部に最も接触する機会の多い釣り人から見た海の様子と、いま海でなにが起きているかを、広く市民のみなさんに知っていただき、ともに大阪湾(ちぬのうみ)を回復させるための水質調査の概要です

NPO法人釣り文化協会とは

2005年7月に認可を受けました。

釣り人のボランティア活動資格である「公認釣りインストラクター」を中心に、釣りのマナー、技術の指導と、環境保全や、海辺清掃、ごみ調査などの活動を行っています。ほかに「大阪市立南港魚釣り園」の運営をお手伝いして常設釣り教室を開いています。

2



手作りの調査器具で

- 「ちぬの海ふたたび」を合言葉に、釣り人たちが、自分たちが最も親しんでいる釣り場周辺の水質調査を行いました。
- これまで沖合での水質調査は行われていましたが、護岸や湾内での調査事例はありません。

3

ちぬの海ふたたび

- 大阪湾は、記紀の時代から「ちぬの海」と呼ばれ、さまざまな魚の宝庫でした。堺の浜に近い貝塚からは、古墳時代にイイダコを取ったと思われる蛸壺や、オモリが出土しているほか、わが国の伝統的な漁法や、一本釣り漁業の発祥の地ともされています。
- 昭和35年ごろから、沿岸の工業地化や、産業排水の流出で海が汚染され、これに昭和40年代に行われた埋立地の造成が、拍車をかけ、大阪湾の水質は急速に悪くなりました。それにつれて魚類も大幅に減少しています。
- 近年、企業や市民全般に、環境への関心が高まるにつれ、水質そのものは、次第に回復に向かいつつあるように思われます

4

調査事例は300以上

- 調査の結果、溶存酸素の数値や、風によって起きる湧昇流に影響されて発生する青潮現象の予知と青潮の現場をキャッチしました。
- 護岸に付着するムラサキガイの死滅、カニの大量な避難、岸近くにすむカサゴ、メバルの斃死などが確認されました。
- 釣り人が予知できるのは、釣れる魚の水深です。アジ、クロダイなどの泳層が変わります。

5

専門家に聞けば原因は

- ◇大阪湾の富栄養化によるプランクトンの大発生と、海底の土砂採集の穴や、埋立地による潮流の停滞とのことです。
- ◇海底の深みや淀みにプランクトンの残骸が堆積し、溶存酸素が少なくなり、嫌気性細菌が繁殖して、硫化水素が発生します。
- ◇硫化水素は空気に触れ、青白い結晶になることで青潮が起こります。
- ◇これが、魚や貝だけでなく、海のすべての生物を死滅させます。

6

北東の風が吹けば青潮が出る

- 調査は昨年夏からですが、釣り人がみて、魚の釣れ方から判断すれば、ここ数年、梅雨のあと、水温が上がって赤潮が発生し、7月以後に、北東の風が吹けば、いつ青潮がいつ発生してもおかしくない海の状態になっています。
- このまま放置すれば、大阪湾の生物に大きな影響を及ぼすことと思われます

7



発生した青潮

8



避難したカニ

9

数多くの一般市民が参加して

- ◇調査にあたり、大阪湾の水質に対する危機を共有し、ごみの流出や海の富栄養化を防ぐとともに、行政のほうでも潮流の停滞を防ぐ方策を考えていただく。
- ◇官、民、企業一体になって「ちぬの海を」守るムーブメントを展開していく
- ◇全国各地で同じようなケースを発見し、事前に防止策を考える活動にしていきたい。

10

今年も引き続き調査を継続

- 夏ばかりではなく、年間を通じて調査を続け、より多くの人々に大阪湾の海の現状を知ってもらうことで、大阪湾の荒廃への対策が共感を呼ぶ。
- 都市や産業と自然環境の変化は避けられないとしても、それを享受して生活している以上、環境への負荷を少なくし、できれば回復にまで移行するのが、市民の務めではないか。
- 海を享受させてもらっている釣り人にはそれを呼びかける義務がある。